

## 理想の保育者の資質について①

### 西 本 脩

にしながら、よい保育者の特質について、もう少し詳しく検討してみようと思います。前にも述べたように、よい保育者に必要な特性として挙げられるものは、時代によっても、国によってもちがいますが、またそれを考える学者の教育観、人世観、価値観やイデオロギーによっても非常に異なります。が、ここではなるべく客観的に考えてゆきましょう。しかしながら、私自身の主観的なものを全く排除することは出来ませんので、そのような点については、読者の皆さまの御批判を仰ぎたいと思います。

私は、理想的保育者の資質として考えられる諸条件を、便宜上次のように分けました。

- 一、身体・外貌・言語等の外的条件
  - 二、内的条件
    - 1、能力・学識的条件
    - 2、人格・性格的条件
  - 三、指導(保育態度)的条件
  - 四、その他の条件
- 次に、これらの各条件について、それぞれ具体的に見てゆきましょう。
- 一、身体・外貌・言語等の外的条件

(1) 健康で正常な身体を持つこと、特に呼吸器系統の疾患をもたないこと。

健康であることは、保育者だけに限らず、すべての人間の活動の基調であり、源泉であります。特に保育者については、このことがいくらか強調されても、強調され過ぎることはありません。発育盛りの「動きまわる幼児達」と、行動をともにしなければならぬ保育者は、何はさておいても、健康に恵まれていなければなりません。殊に、免疫性のない、抵抗力の弱い幼児を相手にする仕事ですから、結核やその他の伝染性疾患を持っていないことが絶対に必要な条件です。又ただ単に病気をもっていないというだけではなく、いつも生氣潑刺として明朗快活でなければなりませんし、どんなことにも耐えられるねばり強さも必要です。実際、保育者としての生活は肉体的な面だけについてみても、かなりはげしい労働です。この劇務に耐えるだけの健康体でなければ、とうてい保育の仕事にたずさわることは出来ません。又身体の健康は直ちに精神の健康と関係がありますから、もし身体の健康に欠陥があると、精神的にも不健康となり、それによる不愉快な感情は保育

前回は、理想の保育者の資質及びそれと関連のある理想の教師の資質について研究されたもののうち、代表的なものについて、紹介を試みました。今回は、それらの研究を参考

の態度に関係し、幼児の心身に悪影響を及ぼすことにもなりかねません。保育者の睡眠不足、過労、暴飲暴食なども、直接間接に幼児に対する保育態度に微妙に関係するものですから、保育者はいつも、自分の身体や精神の健康状態を最善の状態におくよう心掛けなければなりません。健康は一面においては、先天的な資質によるものではありませんけれども、また他面においては、日々の節制と努力、気力によって養われるものです。

(2) 著しい機能障害をもたないこと。

例えば、色盲、難聴、発音障害などの、著しい機能障害がある場合には、いうまでもなく、保育者としては不適任でしょう。

(3) 正常な運動機能をもっていること。

いうまでもなく、保育者は幼児と共に遊び、活動の出来る人でなければなりません。したがって、手足やその他の運動機能に障害のある人は（ごく軽度のものは除いて）大体において不適当であるといえましょう。

(4) 容姿端正で、人に好感を与えること。

保育者は、商店の販売係や女優ではありませんから、必ずしも美貌の持主でなければならぬことはありませんが、やはり園児やそ

の両親達というような人びとに接する職業であり、小さな幼児でも、なかなか敏感です。で、これらの接する人々に不愉快な感じを与えるようではいけません。容貌は先天的なものでいたし方ありませんが、姿態、風采、服装となると問題は別になってきます。保育者はファッション・モデルではないので、そんなに華美なものを着る必要はありません。あまり上等のものを着ていると、服が気になります。幼児と遊ぶことが出来にくくなります。幼児達に少々よごされても惜しくないような服装でないと、よい保育は出来ません。又あまり地味な喪服のようなのも、幼児に対する情操教育の面から考えて、感心しないと思います。幼児でも、なかなか服の色、形などには敏感です。いつも、保育者がどのような、服装をしているかによって、その園（組）の幼児の色彩感覚、情操が知らず知らずの間に養われてゆきましょう。又垢じみで形のくずれたものを着ているのも感じのよいものではありません。スカートの折り目をととのえ、清潔に洗濯した下着や靴下を着用していただきたいのです。要は、高価なものでも、上品な色調で、清潔な、きれいさっぱ

りとしたものをきちんと身につけていることです。毛髪も端正に、毎日梳り、お化粧なども、上品なウス化粧がよいでしょう。最近流行の男か女か分らないような毛髪の色や服装などは、保育者としては余り感心しないように思います。何故かといいますと、幼児達は髪の色や、服装によって、男、女の区別をつけているのですから、又保育者がいつも正しい姿勢をしていることも大切なことです。

(5) 言葉使いが正しくきれいなこと。

保育者の言葉が標準語に一致し、アクセントが正しく、発音が明瞭であることは大切なことです。幼児期はちょうど日本語を習得する時期に当たっています。ですから、保育者の言語の影響力は、非常に大きいと云えましょう。この時期に、いつの間にかついでしまつたなまりは、大きくなつてもなかなか取れないものです。保育者自身も、幼ない時から育ってきた環境の影響を受けて、知らず知らずの間に身についたなまりなどなかなかぬけきらないものですが、標準語に近づけようといつも努力する人としなない人とは、その結果に大きな差が出来てきます。保育者は幼児の言語指導をする重大な責任を担っているので

すから、このような努力をすることが必要でしよう。それから、語いや言いまわしは、幼児にわかりやすいようにいうことをいつも心掛けないけません。又、幼児の言語を指導する立場から問題になるのは、「お外へ出てお遊びしましょう」「お絵かき」「おならび」等々の、何にでも「お」をつけるバカていねいな（実はもはやていねいな精神はぬけて、形だけのものなのですが）言い方です。これも、幼児に正しい日本語を教える意味からいって避けなければならぬと思います。

また、あまり早口でいい過ぎたり、幼児がさわぐので、これに対抗するために大きな声をはり上げたり、非常にきついものいい方をしたりしないで、ゆっくりと、余り大き過ぎず小さ過ぎない声で、おだやかない方をすることが必要でしょう。

## 二、内的条件

### 1、能力・学識的条件

(1) 円満な常識をもちもの分りが良いこと  
保育は単なる知識、単なる技術ではありません。したがって、保育者は、ただオルガンがひけ、童話が上手で、保育のことだけを知っておればよいというものではありません。

随分、各方面にわたっての常識がないとつまりません。幼児はいろいろなことを、保育者に質問します。そんな場合に答えられなかったり、出鱈目な返答をしたのでは困りますし、幼児がラジオや映画などで見聞して憶えてきたことをいったり、したりしているのに保育者が知らないというのも困ります。

また園児の両親には、職業においても教養においても、様々の人々がいるわけですからこれらの両親からの訴えを聞いたり、両親を指導したりして、家庭と園との結びつきを緊密にし、保育の効果を一層挙げるためにも、保育者が常識のある、話のわかる、い人わかる話せる人でなくてはなりません。

(2) 自己の専攻した学問に対する深い学識をもつこと。

保育者は、自分の専門とする知識や技術に対する深い研究と造詣をもち、その道の権威でありたいものです。このことよって、両親が安心して、その子女を保育者に委託することが出来、また家庭における子女の教育に關しても、保育者を信頼してその指導を受けながら、これをおこなうということで、始め、幼稚園・保育所と家庭とが一体になって

幼児の心身の健全な成長をはかることが出来るのです。保育の効果を挙げるためには保育者が、園児の両親から信頼されるに足る学識をもっていなければなりません。

(3) 社会人として正しい人生観をもつこと  
自分が幼児の保育にたずさわっているのは何のためか。自分にはどんな使命が負わされているか。この変転きわまりない社会の一員として、この時代に処して行くには如何にすべきか等々……のことに關して、しっかりした信念をもっていることが大切です。今日のような、原水爆の脅威にさらされている社会情勢のもとでは、政治の力にくらべて、保育者の力、保育の仕事はなほは無力のように見えますけれども、実はそうではありません。私達保育者がみんな、人間の尊厳を重んじ、人々がお互に敬愛し合い、すべての人々が平和なより幸福な生活をする事が出来るようにとこい願うヒューマニズム、民主主義、平和主義を確信して、日々の保育に当るならば、その保育を受けた幼児が将来一人前の社会人となった時、よりよい社会が建設されるでしょうから。社会がよくならなければ、人間はよくならないと共に、社会をよく

するためには人間がよくならなければなりません。この人間をよくする役割を担っているのが、私達保育者であることを自覚しなければなりません。只漫然と、その日ぐらしの生活をしているのではなく、人間としての自覚、保育者としての信念、誇りを持つことが大切です。

(4) 世界、国家、社会の動向を適確に洞察する能力をもつこと。

保育者は、狭い保育の世界の中にだけ止まっているのではなく、保育、教育問題はもちろんのこと、教養の高い文化人として、広く政治、経済、文化等のいろいろな問題についても、広い一般教養をもっていることが必要です。このような広汎な知識の持主であってこそ始めて、充実した、偏りのない保育が出来るのです。わずか半世紀の間に、世界大戦を二度まで経験した私達は、未だに戦争の脅威から、すっかり解放されてはいません。しかも原・水爆或いはそれ以上の恐るべき破壊兵器の出現によって、もはや第三次世界大戦は人類の破壊を招くものと考えられます。したがって、原子力の平和利用、平和共存によって、新しい平和なより幸福な共存共栄の世界

を建設しなければならぬことが、強調されるようになってきました。私達保育者も、こういう世界の動きに着目して、平和を愛する人間を育てるための保育を行わなければなりません。平和の維持は、一人一人の人間が、幼ない時から次第次第に心の中に建設された「平和を愛する心」によって、はじめて実現するものだからです。

(5) 多方面にわたる人間的教養に富むこと

「教師は教師たる前にまず人間たれ」とは、近頃よく主張されることです。人間とは何かを理解し、人間としての自覚と反省を持つこととなしに、只保育の技術や方法の習得だけに終始するならば、視野の狭い、見識の乏しい保育者になってしまいます。ところが、保育者も人間であり、人間として人の子を保育していくのですから、それには何よりも、人間としての広い教養を必要とします。人間的教養のない保育者は保育者として不適格であると思います。

(6) 高尚な趣味の豊かなこと。

保育者も人間であり、人間としての愛情や趣味が豊かであることが望ましいと思えます。このことは、幼児の情操教育の点から

も、又幼児の個性をのばす意味からも大切なことでしょう。

(7) 絶えず学問技芸の研究に努力すること

前に(2)で述べたように、保育者は保育をし、よく上において必要な知識・技能を身につけることが大切です。そのためには、教育原理、啓学、保育原理、教育史、幼稚園管理、教育心理学、社会学、教育社会学、児童・乳幼児心理学、発達心理学、精神衛生学、生理衛生学、看護学、栄養学などを研究するとともに、たとえば幼児の観察、精神検査、個性調査、事例研究、遊びの調査や家庭生活環境の調査、簡単な医学的知識と手当てなど、幼児の指導に必要な科学的技術と処置を具体的に習得することが必要です。又音楽リズム、絵画製作等々の保育内容、保育技術についての研究もしなければなりません。これらの学問技芸は、時代のうつりかわりと共に、日進月歩の歩みをつづけるものであり、したがってどんなに研究しても、これで研究し尽したという終点はないはずです。ですから、私達はいつも研究しようと努力することが大切で

(つづく)